

発達障がいってどんなもの？

小島慶子さん（元テレビアナウンサー、エッセイスト、ラジオパーソナリティ）は、小さい頃、落ち着きがない、じっと話を聞くことが苦手、退屈なことが耐えられない、面白いことを見つけると集中するがやめることができないそんな子でした。

一方、他の人では考えつかないことをひらめくことがありました。ただ、ぱっと思いついたことは、声を出して言ってしまいます。しかも、その思いついたことは、小島さんの頭の中では、いくつも繋がっていて、最後に出た考えなのです。周りの人は、どうやってその考えにつながったのか、その過程が分かりません。だから、変な事を言う子だなと思われるってしまうのです。

周りの子たちを見ると、自分のことをいやな子だと思っていることは分かりました。自分が悪い、考えるとつらい、そんな思いがめぐって、なぜ、うまくいかないのだろうか悩んだそうです。15歳の時には、摂食障害になり、食べては嘔吐を繰り返していたそうです。そこで、高校生の時、周りの人でうまくいっている人を見て、真似をしてみることから始めました。うまくいっている人の真似を繰り返すことで、少しずつ周りの人とうまく付き合えるようになってきました。

就職をするときには、毎日違うニュースを伝えたり、その場でコメントを考えて話したりしなければならぬ仕事であるテレビアナウンサーになりました。同じことの繰り返しがなく、その場に合わせて話さなければならぬテレビアナウンサーは、小島さんにはピッタリの仕事でした。

現在は、家族はオーストラリアに住んでいて、日本とオーストラリアを行ったり来たりしながら、ラジオキャスターや執筆の仕事をしているそうです。

自身が発達障がい（ADHD）であることは、40歳を過ぎたころに診断を受け、それを聞いた本人は、今までの自分の苦勞はそこに原因があったのかと納得したそうです。発達障がいは、一人一人違いますし、診断を受けたときの感じ方も人それぞれです。

発達障がいの診断がある、ないではなく、その人は、何に困っているのかが大切なことです。この人は、発達障がいだと距離をとってしまったり、この人はダメな子だと決めつけたりすることが、本人にとって一番辛いことです。何に困っているのだろう、できることは何だろう、私に助けてあげられることは何かあるかなと考えられる人が増えたら、発達障がいの人だけでなく、みんなが生きやすい世界になるのではないのでしょうか。